

電子処方せんの実証実験をスタート

実証実験開始日に電子処方せんを応需した
ツヤマ薬局医大前店



病名、検査値も 薬局側に提供

香川県下30薬局と

香川大学医学部附属病院と



香川大学医学部附属病院



香川大学医学部附属病院外来診察室で専用Webサイトを見る院長の石田俊彦氏。薬局で変更された後発品や、薬局薬剤師からのコメントを確認できる



外来診察室にて設置されたパソコンのタッチパネルを患者が操作し、電子処方せんを薬局に送る



専用Webサイトを開き、病名や検査値などを確認するツヤマ薬局医大前店管理薬剤師の西峯章代氏

から香川県内で始まった。香川大学医学部附属病院から地域の薬局にインターネットを利用して処方せんを電子的に送信する試み。今年3月末までに30人の患者をメドに電子処方せんを交付し、効果や課題を検証する。

電子処方せんシステムの開発は、香川県内に医療系学部を有する徳島文理大学、香川大学、香川県立保健医療大学の3大学が連携した「高度な医療人養成のための地域連携型総合医療教育研究コンソーシアム」事業の一環として進められた。この事業には2008年度から10年度まで、文部科学省から補助金が出ている。

実証実験に参加するのは香川県内の30薬局。インターネットに接続されたパソコンさえあれば参加可能だ。専用のWebサイトを開くと、患者から送信された電子処方せんの情報を見ることができる。処方薬の名称、用法、用量など通常の処方情報だけでなく、病名、検査値など患者情報をまで閲覧できることが、このシステムの大きな特徴だ。

医師は、処方薬が薬局などの後発医薬品に変更されたのか、Webサイトで確認できる。また、Webサイトのコメント欄を通じて、医師と薬局薬剤師が相互に情報をやりとりし、意思疎通を深められる。

通常、紙の処方せんには病名は記載されない。病名すら分からぬまでは、薬剤師としての職能を十分に發揮できないのが現状だ。薬局薬剤師は患者から病名を聞き取つたり、検査値を見せてもらつたりして病態の把握に努めているが、情報の入手に手間がかかつたり、全ての患者から情報を得られるわけではないことが課題だった。

医師と情報を共有化し、双方の情報のやりとりを促進させることで、薬局薬剤師にもチーム医療の一員として力を発揮してほしい――。関係者のそんな期待が、このシステム開発の背景にある。

電子処方せんシステムの実際の画面。
病歴を閲覧できる



(左) 飯原なおみ氏
システム開発を主導した原量宏氏

電子処方せんの専用Webサイトを
携帯端末で閲覧する、アイ調剤薬局
管理薬剤師の原丈晴氏



に参加した。管理薬剤師の原丈晴氏は「複数の疾患に効果がある薬剤が処方された時、多く使われる疾患例に出でて患者さんが症状を尋ねるが、その疾患でない場合、患者さんは一時的に不安になる。病名が分かることで、その問題が解消される」と述べ、「チーム医療に参加し、

責任を持つてやつていきたい」と強調する。

香川県薬剤師会の立場から、

「かがわ遠隔医療ネットワーク」の機能を活用

川県で発展してきた「かがわ遠

隔医療ソフトウェア(K-MIX)の機能を利用して、構築さ

れてる。

K-MIXは、複数の医療機関で診療情報や各種画像情報を共有できる

システム。医療機関に蓄積された各種データを、K-MIXのサーバーを介して、他の医療機関に送る。標準的な形式にデータを変換した上で、共有化したことなどがポイントだ。この仕組みによって、各医療機関では、どの会社の電子カルテを使おうとも、

データを取り込み、閲覧でき

る。

香川県や国の電子カルテネットワーク事業を前身に、香川県の事業として03年に立ち上がり

た。現在は香川県医師会が運用

している。Web電子カルテ、治

療機関で診療情報や各

種画像情報を共有できる

システム。

医療機関に蓄積された各種データを、K-MIXのサーバーを介して、他の医療機関に送る。標準的な形式にデータを変換した上で、共有化したことなどがポイントだ。この仕組みによって、各医療機関では、どの会社の電子カルテを使おうとも、

データを取り込み、閲覧でき

る。

データを取り込み、閲覧でき

る。

データを取り込み、閲覧でき

る。

かがわ遠隔医療ネットワーク」の機能を活用

香川県薬剤師会の立場から、
実証実験に参加した

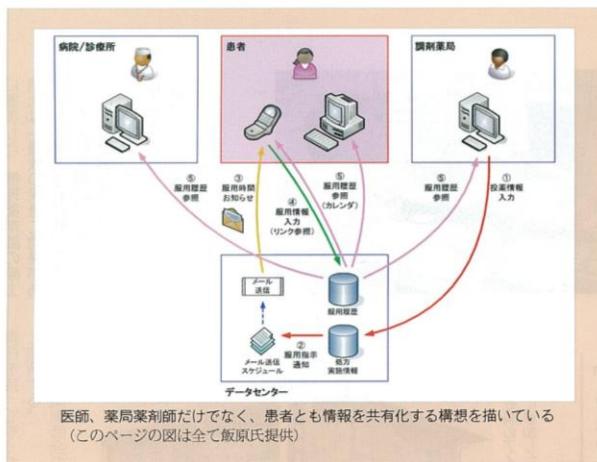


副会長の中山幸子氏(中山スズラン堂薬局)は、薬剤師会としてできるだけ協力している。現場の薬剤師が意欲的に、なってくればたら、いい。まだ様子見の薬局は少なすぎ、金額に応がれはも、我もと手を挙げなければいけない時がくると思ふ」と語る。

電子処方せんのシステム構築を主導してきたのは、徳島文理大学香川薬学部准教授の飯原なおみ氏。病院薬剤師として働いた経験を振り返りつつ、システム開発の狙いを次のように話す。

「病院薬剤師も、最初の頃は『薬剤師が病棟に来て何ができるの』と言われながら10年以降にかけて、チーム医療の一員として理解されるようになった。薬剤師も、時間かけて取り組んでいけば必ず、地域でのチーム医療も実質化していく。それには医師と情報を共有し、コミュニケーションを図れる環境が欠かせない」

医療機関を結ぶネットとしてさらに発展へ



Webお薬手帳の開発も計画



他の中核病院への拡大を構想

今後、実証実験で成果を出し、来年度以降新たに公的な資金を獲得できれば、『電子処方せん』システムを香川大学病院だけでなく、県内の他の中核病院にも普及させたい』と原氏、飯原氏は語る。

電子処方せんシステムの機能向上も図る計画だ。現在、電子処方せんの各データはWebサイトに表示されるだけで、そのまま薬局のレセプトコンピュータに取り込むことはできない。処方情報をレセコンに手で入力せねば済むのが、処方せんを電子化するメリットの一つといえる。データを取り込む機能の開発を進め、処方入力ミスを防げるシステムを検討したいといふ。

さらに、飯原氏は、「Webお薬手帳の開発に取り組みたい」と語る。これは、患者が携帯電話や自宅のパソコンからデータを表示。服用時間を知らせたり、日々記録できるシステムにする構想だ。

「これをもとに患者さんは医師や薬剤師に話ができる。患者さんが医療に参加するツールとして使える」と飯原氏、過去の副作用歴、アレルギー歴を表示する仕組みも設け、副作用回避にも役立てたいという。

飯原氏の専門分野は薬剤疫学。日本では現在、様々な解析を実施しようとしている。情報源となるデータベースが十分に整備されていないのが課題だ。K・M・Xのサーバーに様々なデータが蓄積されていけば、それをデータベースとして利用できる。「薬局において気づいた、ちよつとした副作用疑いもデータとして残すことで、医薬品の安全性向上や新薬開発に役立られる」と期待している。